名古屋芸術大学研究紀要第46巻　253～265頁（2025）

郷土を舞台とした文学教材の魅力
― 岐阜県大垣市における芥川龍之介「疑惑」 ―

The Attractions of Literary Teaching Materials Which are Set in the Homelands
*— Suspicion (*Giwaku*) Written by Akutagawa Ryunosuke*
in Ogaki City, Gifu Prefecture —

西田　拓郎　*NISHIDA Takuro*
（教育学部）

【要旨】
国語科の授業で用いる教材に文学作品がある。教科書の文学作品はもちろんのこと、地域の文学作品を補うことも多い。子供が進んで読書し人生を豊かにする態度を養うためである。かつて岐阜県の教員だった私も、岐阜県の文学作品を与えてきた。子供たちは興味・関心をもって読み進めた。
芥川龍之介に大垣を舞台とした小説「疑惑」がある。粗筋は次のとおりである。
――私は実践倫理学の講義を頼まれて大垣に来た。教えを請いに来た男が次のように語る。「大垣で濃尾震災に襲われた。家の下敷きになった妻を救おうとするが、迫りくる火の手に『生きながら焼かれるよりは』と妻の頭へ瓦を打ち下ろした。妻を手に掛けたことは誰にも言えない。数年後『風俗画報』の濃尾震災号を目にすると、当時のことが頭に甦り、妻殺しを告白した。その後は暗い生活を送っている」この話を聞いた私は、彼に何の言葉もかけることができなかった。――
実践倫理学とは人間の生き方を考察し現実の問題に適用する学問のことである。当時、その権威であったはずの「私」が、実際に起きた問題には何の役にも立たなかったと描かれている。
芥川はなぜ大垣を舞台にしたか。大震災が大垣を襲ったことは事実である。しかし、甚大な被害を被ったのは岐阜も名古屋も同じだ。それなのに、あえて大垣を選んだのはどうしてか。このような課題を追究する姿こそ大切にしたい。
もともと岐阜県は教育熱が高かった。明治５年「学制」が公布されると、すぐに大垣の「小学義校」を文部省へ開業申請する。明治６年、「小学義校」開設のための県への寄付金額は全国一であり、その額は関東地方の総額に匹敵した。また、明治20年に「学位令」が制定されると大垣は博士を次々に輩出した。さらに明治30年代後半になるとその数が９名となった。全国でも類を見ない学問の町だったのである。この小説でも大垣町長を会長とした大垣の教育団体が厚遇で「私」を招聘している。しかし、大垣が求めていたその学問は用をなさなかったのである。
さて、この小説が出版された大正８年は大正デモクラシーの真只中。芥川は大垣を舞台にすることで日本の教育改革を訴えたかったのではなかろうか。
この短編小説「疑惑」を手にした子供の読み取りがどのように展開していくか楽しみである。学校での学びは授業時間に閉じるものではない。教室を出て、学校を出て、現実社会へ出てからも生きて働く探究心をもった学びであってほしい。

【キーワード】
郷土　文学教材　大垣　芥川龍之介　疑惑　濃尾震災

はじめに

私は長らく岐阜県大垣市の小学校および中学校の教員として国語の授業を行ってきた。児童生徒に言葉の力を身に付けさせるために、教科書での指導はもとより、郷土を舞台とした文学作品を補助教材、発展教材として示してきたのである。そうすると、児童生徒はとても興味を示し、探究心をもった。その中には、教科書に収録されている文学作品のみ

を教材とした授業では実現困難であろう学習内容があった。また、それを扱うと、児童生徒はより効果的に言葉の力を身に付けていくことができた。

とはいえ、私が実際に中学生に指導していたのは15年ほど前のことであり、残っている記録も僅か、記憶も薄れた。確かなことと言えば、教師であった私と生徒であった中学生は、郷土を舞台とした文学教材に探究心は抱いていたものの、知識・理解はまったく同じレベルであったことである。そして、私は生徒の姿に触発されながら今日まで細々と教材研究を積み重ねてきたことである。

本稿では、岐阜県大垣市が舞台となっている芥川龍之介作の「疑惑」を取り上げ、現在までの教材研究の内容を紹介する。そして、私自身の15年ほど前の教育実践を振り返りながら、郷土を舞台とした文学教材の魅力を考察することにする。

１章　郷土・大垣を舞台とした文学作品をなぜ教材として与えるのか

1–1　教材として与えてきた文学作品

私は大垣市の教員として、郷土・大垣を舞台とした近・現代文学作品を小中学生に教材として与えてきた。その多くは夏休み前の読書案内や課題研究での指導であった。その文学作品の一部を次に示す。

・「恩讐の彼方に」　菊池　寛
・「疑惑」　芥川龍之介
・「花筵」　山本周五郎
・「美濃浪人」　司馬遼太郎
・「一の糸」　有吉佐和子
・「細香日記」　南條範夫
・「序の舞」　宮尾登美子
・「長良川」　豊田　穣
・「細雪」　谷崎潤一郎

このような郷土を舞台とした文学作品を教材にすると、（学び手が）より言葉の力を身に付けられると考えたからである。

1–2　先行研究

武久康高（2013）[1)]は「郷土教材」学習の目的を次のとおり提案している。

授業では、
①　「郷土」がどのような立場から、いかに語られているか、
②　そこからどんな思い（思惑）が読み取れるか、
③　①②の「郷土」の語られ方や思い（思惑）についてどう思うか、

④　自分だったら「郷土」の何をどう表現するか、
といった問いを発することにより、「郷土」の表象に関わる問題を考えたり（自分やクラスメートの「郷土」への見方と比較することで作者の見方を相対化する）、「郷土」そのもの、あるいは「郷土」と自己との関係性を見つめ直すきっかけにすること（「郷土」に対するものの見方を広げ、深める）を目的とする。

まったくもってその通りだと賛同したいが、①～④の４つの問いをもって目的を達成しようとしているところが気になる。問いを指導者が準備している以上、それに対する解答や指導法が準備されているということになる。果たしてそうしないと目的は達成できないのであろうか。

郷土教材を扱った私の指導の多くは夏休み前の読書案内や課題研究での指導であった。それは極めて短時間の授業であり、深い教材研究などはしていなかったのが正直なところである。それでも、児童生徒は強い関心・意欲を示した。そこにこそ郷土教材の魅力があるのではなかろうかと私は考える。

この考えに基づき、私は次のような仮説を立てて、教育実践に臨んできた。

1–3　仮説

郷土を舞台とした文学教材を児童生徒に与えれば、

① 郷土の人や地名が登場するため、学習者が親しみを持ちやすくなり、自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとすることができる。

② 郷土の歴史や文化に基づいているため、学習者が場の状況を想像しやすくなり、言葉の力を高めることができる。

③ 郷土の文化や風土を反映しているため、学習者が共感しやすくなり、文学作品の役割と意義を理解することができる。

郷土・大垣を舞台とした文学作品の中から、本稿では「疑惑」（芥川龍之介）を取り上げて述べることにする。

２章　「疑惑」（芥川龍之介）の冒頭とあらすじ

2–1　大垣を舞台にしていることを鮮明に打ち出している「疑惑」の冒頭

「疑惑」（芥川龍之介・作）[2)]の冒頭の段落は次に示すとおりである。

今ではもう十年あまり以前になるが、ある年の春私は実践倫理学の講義を依頼されて、その間かれこれ一週間ばかり、岐阜県下の大垣町へ滞在する事になった。元来地方有志なるものの難有迷惑な厚遇に辟易していた私は、私を請待してくれたある教育家の

団体へ予め断りの手紙を出して、送迎とか宴会とかあるいはまた名所の案内とか、そのほかいろいろ講演に附随する一切の無用な暇つぶしを拒絶したい旨希望して置いた。すると幸私の変人だと云う風評は夙にこの地方にも伝えられていたものと見えて、やがて私が向うへ行くと、その団体の会長たる大垣町長の斡旋によって、万事がこの我儘な希望通り取計らわれたばかりでなく、宿も特に普通の旅館を避けて、町内の素封家N氏の別荘とかになっている閑静な住居を周旋された。私がこれから話そうと思うのは、その滞在中その別荘で偶然私が耳にしたある悲惨な出来事の顛末である。　（下線、筆者）

ここで、作者・芥川龍之介（以下、芥川）は、この小説の舞台は大垣であるとはっきりと示している。小説中の「私」が大垣へ厚遇で講演に招かれて、そこで「耳にしたある悲惨な出来事の顛末」を語っているのである。なぜ、東京に住む芥川が、きわめてローカルな大垣を具体的に取り上げて小説の舞台に載せたのだろう。もしかすると、ここには芥川の大きな意図があるのかもしれない。とりわけ、大垣市に学ぶ児童生徒にとっては、そこにこそ郷土を舞台とした文学作品に親しむ重要なポイントがあるのではないだろうか。

2–2　あらすじ

芥川が書いた小説「疑惑」のあらすじ（筆者による）は次のとおりである。

私は実践倫理学の講義を頼まれて大垣に来た。教えを請いに来た男（中村玄道）が次のように語る。

「大垣のK小学校の教員をしていた時、濃尾震災に襲われた。家の下敷きになった妻を救おうとするが、迫りくる火の手に『生きながら焼かれるよりは』と妻の頭へ瓦を打ち下ろす。その後、妻を手に掛けたことは誰にも言えない。そして、愛情でなく、殺したくて殺したのではないかという自らの疑惑に苛まれつづけた。数年後『風俗画報』の濃尾震災号を目にすると、当時のことが頭に甦り、再婚の結婚式の場で妻殺しを告白した。その後は暗い生活を送っている。」

この話を聞いた私は、彼に何の言葉もかけることができなかった。

３章　濃尾震災

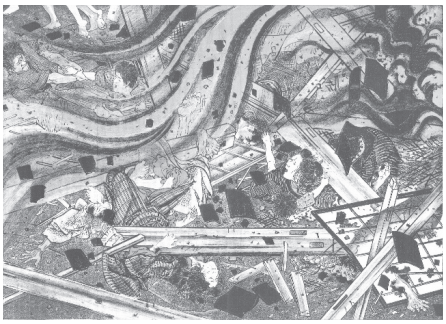
3–1　濃尾震災とはどの程度のものだったか

岐阜県公式ホームページ（防災課）[3]によると、濃尾震災は明治24（1891）年10月28日午前６時37分に、岐阜県本巣郡根尾谷（現本巣市根尾）を震源地として発生した。マグニチュード8.0の世界でも最大級の内陸直下型地震であった。死者は全国で7,273人、全壊・焼失家屋142,000戸にのぼる。

この約30年後、大正12（1923）年に関東大震災が起きるが、マグニチュード7.9である。

その約70年後、平成７（1995）年に阪神・淡路大震災が起きるが、こちらはマグニチュード7.2である。どちらもマグニチュードが濃尾震災より小さい。それからまた16年後、平成23（2011）年に東日本大震災が起きる。こちらがマグニチュード9.0である[4)]。記録が残る中では、これが日本で起きた最も大きい地震である。しかし、東日本大震災の震源地は三陸沖の宮城県牡鹿半島の東南東130km付近である。したがって、内陸地震では濃尾地震が過去最大であるということになる。

【写真１】



【写真２】

『風俗画報』第35号　（東陽堂）[5)]

3-2 『風俗画報』の報道

その様子をすぐに『風俗画報』（上掲写真）[5)]が報道する。【写真１】がその表紙である。【写真２】が本小説「疑惑」に登場する「『風俗画報』第35号10月28日震災記聞の挿絵」である。今で言うならば写真週刊誌「FRIDAY(フライデー)」のようなものであろう。絵図で事件事実を報道している。

これを、作中人物の中村玄道が震災の約２年後に本屋で見たのである。小説「疑惑」の該当部分は次のとおりである。

私が散歩かたがた、本願寺別院の裏手にある本屋の店先を覗いて見ますと、その頃評判の高かった風俗画報と申す雑誌が五六冊、夜窓鬼談や月耕漫画などと一緒に、石版刷の表紙を並べて居りました。そこで店先に佇(たたず)みながら、何気なくその風俗画報を一冊手にとって見ますと、表紙に家が倒れたり火事が始ったりしている画があって、そこへ二行に「明治廿四年十一月三十日発行、十月廿八日震災記聞」と大きく刷ってあるのでございます。それを見た時、私は急に胸がはずみ出しました。私の耳もとでは誰かが嬉しそうに嘲笑(あざわら)いながら、「それだ。それだ。」と囁くような心もちさえ致します。私はまだ

火をともさない店先の薄明りで、慌(あわ)ただしく表紙をはぐって見ました。[2)]

実際に表紙をはぐった絵が【写真２】である。小説「疑惑」の該当部分は次のとおりである。

するとまっ先に一家の老若が、落ちて来た梁(はり)に打ちひしがれて惨死を遂げる画が出て居ります。それから土地が二つに裂けて、足を過った女子供を呑んでいる画が出て居ります。それから――一々数え立てるまでもございませんが、その時その風俗画報は、二年以前の大地震の光景を再び私の眼の前へ展開してくれたのでございます。[2)]

この記述を読むと、芥川は『風俗画報』第35号を見て小説「疑惑」を書いたことは間違いのないところであろう。ところが、この２つの絵が大垣における震災災害の描写であるとは『風俗画報』のどこにも書かれていない。なぜ芥川は小説の舞台を大垣にしたのだろうか。

ちなみに、この10日後の『風俗画報』36号も「震災記聞　前号之続」と表紙に示し２号連続で濃尾震災を報道している。

3-3　大垣の惨状

「一震の下、萬骨枯る。大垣町の惨状はこの一語をもってなすべし」[6)]。『大垣市史』はこの表現で当時の惨状を語っている。『大垣市史』の被害一覧表では、大垣町の総人口18,306に対して、死亡789（焼死243）、傷1,270とある。また、総戸数4,597に対して、全壊3,356、半壊962、破損257であった。そのうち全焼937、半焼５であった。

『文教のまち大垣』[7)]には、「北新町の中島貞三の妻ツルにまつわる話」として、被災した民衆の様子を伝えている。

ツルは足を梁にはさまれ動けなくなった。火が次第に迫ってくるなかを、貞三は警官に応援を求めて梁を取り除こうとしたが、びくともしない。そこで梁をのこぎりで切ろうと取り組んでいるうちに、火はツルの足もとに及び、衣服に移って燃えはじめた。ツルは苦痛にたえがたく、「刀で殺して」と警官にたのむうちに焼死した。

小説「疑惑」の中で語られた話と似ており、もしかすると芥川がこれを参考にしたのではないかとも考えられる。

ともあれ、これらのことから推察すると、大垣市の惨状は、やはり、相当なものだったと考えられる。

3-4　被害は大垣だけだったのか

濃尾震災の被害は広範囲に渡っており、当然ながら大垣だけだったわけではない。『大

垣市史』においても「美濃國に於いて災害の最も甚しかりしは、岐阜・大垣・笠松・竹ヶ鼻・關等の市街地にして、上記五箇所は振動に次ぎて、猛烈な火災起り、宛然修羅の巷を現出し一層の酸鼻を極めたり。」とある。また、先に述べた『風俗画報』35号および36号には、大きな被害があった場所を特定した惨状も絵図で示されている。それは、「長良川鉄橋陥落の図」（岐阜県安八町）「尾張紡績会社破壊の図」（愛知県熱田町）「第三師団兵士死体発掘の図」「愛知病院負傷者救護の図」（愛知県名古屋市）などである。

大垣と同じような被害は広範囲の至る所にあったのだと言えるし、芥川が見たであろう『風俗画報』もそれを報道している。

４章　なぜ大垣が舞台なのか

4–1　大垣の教育熱が語られている

作中人物「私」は、実践倫理学の講義を依頼されて、１週間ばかり大垣へ来たのであった。また「私」を請待したのは大垣の教育家の団体であり、その団体の長とは大垣町長であった。

実は、明治期の大垣には、大垣町長を会長とした大垣町教育会という教育団体があり、教育の普及向上を図ることを目的としたさまざまな事業を行っていた。それは図書館の建設などの大きな事業にまで及んだと言う。著名な講師を招いた講演会を行うなどの教育振興を図っていたという記録[8]もある。小説「疑惑」で語られている「ある教育団体」とは、この大垣町教育会であると推測できる。その他の残存する資料等に芥川が大垣に講演に来た記録を探してきたが現在のところ見つかっていない。同様に、「実践倫理学」の講演会が開かれていなかったかも探ったが、こちらも現在のところ不明である。

ともあれ、芥川はとりたてて町を挙げた大垣の教育熱の高さを表現している。

4–2　大垣の教育事情にくわしい

小説「疑惑」には大垣の教育事情が次のとおり語られている。

> 町には小学校がちょうど二つございまして、一つは藩侯の御建てになったもの、一つは町方の建てたものと、こう分れて居ったものでございます。私はその藩侯の御建てになったＫ小学校へ奉職して居りました。 2）

「町には小学校がちょうど２つございまして……」とあるが、これは尋常高等小学校を指すと考えられる。濃尾震災が起きた明治24年の大垣町には、興文高等小学校（現：大垣市立興文小学校）、六街高等小学校（現：大垣市立東小学校）の２つが存在したからである。ちなみに、明治22年には、大垣町内にはすでに興文、六街、久瀬川、賛育（南寺内）の４つの尋常小学校があった[9]。

郷土・大垣の歴史をたどると、「藩侯の御建てになった」学校とは興文小学校

（Koubunshougakko）のことである。また、「K小学校」のイニシャルとも一致することから中村玄道は興文高等小学校の教員だったという想定であることがわかる。しかし『興文百年史』[10]にある震災当時の興文（尋常及び高等）小学校職員名簿には中村玄道の名前はない。また、中村玄道の話と同じような教員の逸話も残っていない。つまり、中村玄道は芥川の創作人物だということがわかる。では、なぜ、イニシャルではなくフルネームで具体的に示したのかということについては未だわからず興味深いところである。

4–3　岐阜県の教育熱が日本一、その中の大垣は……

明治当初に文教政策を採り、教育に力を入れたと言われる都道府県は数多くある。どこが最も教育に力を入れたかというと、これは様々な判断基準があるので一概に言うことはできない。しかしながら、明らかに岐阜県の教育熱が日本一だったと誇ることができるものがある。

明治５年８月に「学制」が公布される（文部省布達第一四号）。全国を８の大学区に分け、その大学区を32の中学区に分け、また、その中学区の中に210の小学区を設けて、全国に53,760か所の学制に準拠した小学校を作ろうというものである。これは、国民皆学の大方針だといえる。とはいえ、大学区はほとんど教育行政の機能を果たすことができず、実情としては府県が地方教育行政の最高単位であった[11]。

岐阜県の動きは早かった。すぐに学制の「御趣意」をふまえ学校設立に力を入れる。

その中でも、大垣の諸有志は「好機逸すべからず」として、士族・市民相談のうえ小学義校を設け、教則等の体制を整えた「小学義校開業願書」[12]を県に提出する。当時の岐阜県庁所在地であった笠松やかつて藩庁のあった郡上八幡からも申し出があったという[13]。岐阜県は大垣の願書を文部省に提出する。つまり、県内各地から小学校開業を願う動きがある中で、県は大垣の小学義校をどこよりも優先させて文部省に伺うことにしたのである。これは、大垣を「他の標準」として地域に広げ、小学義校設立を促す意図があったと思われる。

義校とは官費に頼らず、民間の寄付金や賦課金などをもとにして学校を設置するというもので、分類上「私学校」に属した。この寄付金について、『岐阜県教育史』[14]は次のように記述している。

> 『文部省第一年報』の「明治六年府県学資献納寄付金高比較表」によれば、岐阜県は47万430円余であり、第二大学区のみならず、全国比較においても、二位の長野県37万3,835円余を大きくひきはなして、<u>岐阜県はまさに突出して全国一</u>であった。
>
> （下線、筆者）

簑島一美(2023)[11]によれば、この金額は関東地方の総額に及ぶものであったとも言う。

また、これは単年度のことではなく、この翌年も岐阜県の学資献納寄付金高は48万円

余で日本一である。しかも、現在の岐阜県は美濃地区と飛騨地区の大きく２つに分けられるが、当時は現在の美濃地区のみが岐阜県であり、当然ながら現在の飛騨地区の分は含まれていない。明治９年になって、それまでは筑摩県の所管であった飛騨地区が岐阜県に編入される。

4–4　大垣の教育水準

ここで、当時の大垣の教育水準について述べておきたい。それは、大垣の教育水準は全国でも例を見ないほど高かったことである。

明治20年学位令が制定されると、大垣から「博士（はかせ）」が次々に誕生した。工学博士の松本荘一郎をはじめとし、理学博士の松井直吉、文学博士の南條文雄、医学博士の佐藤三吉などである。明治30年代後半になるとその数が９名となった。全国でも例を見ない学問の町だったのである。当時の大垣の様子を「大垣青年会誌」第24輯[15]は次のとおり記している。

> 即今に至るまで博士の出づる九、學士殆んど三十名に垂んとす、其他尚高等商業、高等師範、醫學專門學校、高等工業、陸海軍等の高等教育を卒ねたる者を加ふれば殆んど百名に達す、是を大垣の人口一万九千人に比すれば百九十人に就て高等の教育を受けたる者一人の割合なり、（中略）眇たる一町に於いて九名の博士を出せし者全國に其比を見ず由来大垣は水を以て名あり又柿羊羹を以て負ふと云へども、余は其学者の多きを以て大に誇らむと欲するなり。[15]
>
> （訳）今日に至るまで博士９名を出し、学士は30名にならんとする。その他、高等商業、高等師範、医学専門学校、高等工業、陸海軍の高等教育を終えた者を加えると、ほとんど100名に達する。これを大垣の人口１万９千人に対する割合でみると、190人に１人が高等教育を受けていることとなる。（中略）１町において９名の博士を出していることは全国でも例を見ない。学者の多いことで大いに誇りたい。

この他、各界の頭脳として大垣から次々に人材を輩出していることを考えると、大垣は全国でも例を見ない学問の町だったのである。このように、大垣が多くの博士を生み出し、優秀な人材を中央へ送り出した素地として、『文教のまち大垣』[16]は次の３点を挙げている。

⑴　藩政時代から学問奨励をすすめてきた風土
⑵　明治維新に際し、旧藩士たちが将来を考えたとき、学問の世界に生きる道を求めたこと
⑶　困難な道であっても、求め続けるたくましい文教の心が基盤にあったこと

さて、このような大垣だからこそ、芥川が小説の舞台にした理由が見えて来ると言える。

５章　芥川龍之介の主張

5–1　役に立たない実践倫理学

作中人物「私」が、１週間の長きにわたって、大垣に実践倫理学の講演に来たのである。実践倫理学とは、規範や道徳的な根拠について考察し、その成果を現代の実践的な問題に適用する学問のことである。教育熱がすこぶる高く、教育水準のきわめて高い大垣に特に必要とされて来た「私」が、中村玄道の苦悩（実践的な問題）に何も対処できなかったのである。しかし、このようなことは実践倫理学の権威であるはずの「私」もうすうす感じてはいる。中村玄道の話を聞く前に、「私」は、「格別御参考になるような意見などは申し上げられるかどうかわかりませんが。」と自ら述べているからである。

もともと、「私」は実践倫理学の講演に招聘されるほどの権威ではあるが、「変人だと云う風評」であった。この点では、「狂人と云う名前を負わされて」いた中村玄道と類似点がある。しかし、中村玄道は「（自分は）人殺しです」と告白したが、「私」は、実践倫理学は役に立たないと詫びることもできず、「黙然と座っているよりほかになかった」のである。

5–2　大正デモクラシー

濃尾震災は明治24年（1891）である。「私」が中村玄道の話を聞いたのが、それから20年ばかりたった明治44年（1911）頃と推測できる。それからまた10年あまりたった（大正八年六月）に芥川はこの小説「疑惑」を書き上げる。なぜそのような昔のことをこの時期に書いたのだろう。

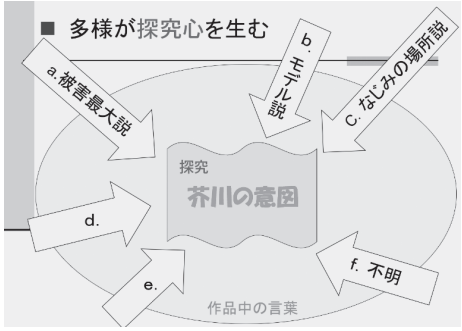
大正８年（1919）といえば、世の中は大正デモクラシー真只中。民主主義や自由主義の運動・潮流が盛んであった。やがて、教育にもその流れは及び大正自由教育運動（1920年代～1930年代前半）へとつながっていく。詳述は避けるが、それは「注入主義」の教育から「児童中心主義」の教育へ、「画一」の教育から「自由」の教育へ変革していこうとする主張であった。生活綴り方教育運動も盛んになっていく。芥川はその先鞭を切るべく、当時の教育に対するアンチテーゼをこの小説「疑惑」に込めたのではなかろうか。

大垣を舞台にする理由もそこにあったのだと私は考える。教育熱がすこぶる高く、成果を着々と積み上げてきた文教のまち・大垣ではあるが、これまでと同じような教育を追い求めていては用をなさない。これからの時代に必要とすべきは人々の生活に生きて働く教育ではなかろうかという芥川の声が私には聞こえてきそうである。

６章　私の教育実践より

6–1　芥川が大垣を舞台にした理由の意見交流

大垣市の中学校に勤務していた15年ほど前の実践（中２対象）である。夏休み前に「自由研究ガイダンス」で小説「疑惑」全文を配布し感想交流した。その後に、芥川が大垣を



舞台にした理由について意見交流した。様々な考えが交流された。その主なものは次のとおりである。

a．被害最大説

濃尾震災で最も被害が大きかったのは大垣である。だから、芥川は大垣を舞台にしたのである。

b．モデル存在説

作中人物「中村玄道」のモデルとなる人物が実際に大垣にいた。だから、芥川はそれを取材して小説にしたのである。

c．なじみの場所説

小説中には大垣の具体的な様子が描かれているので、芥川は何度も大垣に来ていてなじみの場所だったので舞台にした。

6–2　意見交流が探究心を生む

このような予想に基づく読み取りの多様性が、郷土・大垣を舞台とした文学作品への探究心を生んでいくことになる。その後の夏休みに、次のようなタイトルの自由研究が何篇かあった。

・大垣を舞台にした文学作品の研究
・芥川龍之介の研究
・濃尾地震の研究

夏休み後の自由研究発表会では、私も探してきた資料や文献の紹介をしたことを覚えている。生徒は興味深く聞いてくれた。その内容はもとより、教師自身の探究活動の実際がよい教材になると感じた。

実は当時、この小説「疑惑」について、私に深い知識・理解があったわけではない。私も中学生と同じようにわからなかった。ただ、長い夏休みを前にして「探究の材料」を中学生とともに共有したかったというところが本音である。深くて確かな教材研究は大切だが、地域文学教材に対する自分の知識・理解が十分になってからそれを示そうと二の足を踏んでいたら、いつまでたっても郷土文学作品の魅力を教育の場に提供することはできない。

6–3　郷土文学教材の展望

私の中学校教諭としての実践はここにとどまっている。

しかし、その後、大垣市が特別な教科「ふるさと大垣科」[17]を創設することになり、小学校１年生から中学校３年生までが、郷土を舞台とする文学作品について触れることと

なった。私はそのテキスト（俳句・文学編）の編集委員長の任についた。そこには第１章に示した９つの郷土を舞台にした文学作品の「あらすじ」「大垣とのかかわり」「作者について」を簡単にわかりやすく提示した。その他、地域に関わる絵本、伝承、民話、昔話、古典なども紹介した。

その後、改定を加え、紙版からデジタル版にリニューアルされて、現在も大垣市の全小中学生にデジタルで配布し活用されている。

卒業生は私と会うと今でも国語の授業のことを楽しく語ってくれる。私の郷土文学教材研究に目を付けた市立図書館が郷土文学講座を開設すると教え子が大勢来る。手前みそでもあるが、郷土文学の探究に興味をもっていてくれるのだと感じている。

今後、新たに、小説「疑惑」をはじめ、郷土文学作品を手にした児童・生徒の読み取りが、どのように展開していくか楽しみである。文学作品の読み取りは、学校での授業時間に閉じるものではない。教室を出て、学校を出て、現実社会へ出てからも、「生きて働く探究心をもった学びであってほしい」と願っている。

注

1）武久康高「児童生徒が郷土文学教材を学習する意義とは何か―土佐の郷土文学教材化試論―」P30下段 L1～14（『国語教育研究』広島大学国語教育会 2013-03-31）

2）青空文庫作成ファイル（https://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/39_15184.html）底本：「芥川龍之介全集３」ちくま文庫、筑摩書房　1996（平成８）年４月１日第８刷発行　2023年７月４日閲覧

3）岐阜県公式ホームページ〈防災課〉（https://www.pref.gifu.lg.jp/page/5980.html）2024年10月８日閲覧

4）内閣府防災情報のページ（https://www.bousai.go.jp/kantou100/）2024年10月８日閲覧

5）いずれも明治24年11月30日 東陽堂発行、本写真は「復刻版風俗画報」国書刊行会発行より　岐阜県図書館所蔵
「風俗画報」は明治22年（1889）創刊。大正5年（1916）まで27年間にわたって発行。わが国最初のグラフ雑誌。

6）『大垣市史 中』昭和５年（1930）大垣市役所　P810 L5

7）増補改訂版『文教のまち大垣』平成16年（2004）大垣市文教協会　P187

8）『大垣市史 中』昭和５年（1930）大垣市役所　P589

9）増補改訂版『文教のまち大垣』（前出） P235

10）『興文百年史』昭和16年（1941）興文國民学校　P171

11）「飛驒・美濃における小学校の開業」（2023）簑島一美『濃飛史艸』第132号　令和５年１月16日発行　岐阜県歴史資料保存協会

12）『興文百年史』（前出）P75

13）「三 学制の実施 学制の着手順序と文教施策」文部科学省 HP（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317582.htm）2024.10.13閲覧

14）『岐阜県教育史』通史編近代一　P65

15）「大垣青年会誌」（第24輯）P15　明治35年（1902）12月15日　大垣青年会（非売品）

16）増補改訂版『文教のまち大垣』（前出）P189

17）詳細については『岐阜新聞』岐阜新聞社　平成26年（2014）2月 4 日16面に掲載された記事「『大垣科』授業スタート 大垣市の山本譲教育長に聞く」が参考になる。